

[文献紹介] 岡村達雄・古川清治編集『養護学校義務化以後：共生からの問い』

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナー
巻	18
ページ	47-47
発行年	1986-12-07
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019514

文献紹介

岡村達雄・古川清治編集

『養護学校義務化以後 — 共生からの問い —』

(柘植書房 1986年5月刊、1,700円)

早いもので、「養護学校義務化」から8年を経過した。当時すでに、障害児を含めてどの子ども、地域の学校で共に育ち、共に生きることをめざす運動や実践が広がりつつある中で打ちだされた「義務化」は、実質的には「共育」の動きにブレーキをかけ、養護学校・特殊学級・普通学級に子どもを選別・隔離する政策であったが、それはまた「政策」対「運動」の対立というばかりではなくて、教育運動や教育理論における対立を鮮明にした。ここ十年ほどの間に「義務化＝隔離」の思想に逆らう行動は、予想以上のものを生み出したことはたしかであるが、今日、「隔離」の立場に対置する議論や事例を提示することでは不十分なのであって、今どこまで来たのか、明らかになった問題は何か、現時点での壁の性質は何かを総括した上で、「特殊」な教育領域の論議ではなく、教育・学校一般を見直す鍵として「共生」を論ずる必要があるだろう。編集者たちの意図もそこにあったと思われる。

本学の岡村達雄氏と『オヤジの障害児教育論』(柘植書房)の著者である古川清治氏を中心とした共著であり、それぞれの執筆者の角度は、さらに巻末の座談会で照らしあわされる。

編者あとがきに、「共生・共育を求め合いながら、親たちや教師たち、それに『障害者』たちがお互いにわかまりをもち、もどかしさのなかにおかれているのも事実だと思う。だからこそ、いま、私たちにとって率直な相互批判・わかまりのぶつけあいが必要なのだと思う」と編集意図が述べられている。

「ぶつけあい」は「投げかえしあい」にまでには至っていない。そのこと自体が86年時点での私達の位置を鮮明にしているのであろう。

「地域の学校」を「校区の学校」「文部省の出店」とよぶに至った古川氏は、この十年間に学校はより悪くなったとしながらも、地域の子どもの集る場所としての学校を放棄しようとはしない。その葛藤を含んだ論旨は、今、かなり多くの人々の抱えている気持ちをことばにしたものとなる。また「近代学校」批判というより大きな枠組のなかで「共生」を位置づけようと苦闘している岡村氏の論稿は、障害児教育論というより、氏の読者にとって岡村教育論がどういう方向へ向っているのかを理解するのに役立つだろう。

「地域の学校で」論が、拡がりという点ではおそらく全国一になっているはずである大阪の経験が集团的に総括できていないということが、全国的な総括においても弱点をつくりだしているということを筆者はあらためて感じる。岡村氏のいうように、権利を一定程度保障することによって統治する構造を十分対象化しないと、運動の拡がり体制内化し、形式化する。点と線が面となり、一たん沈静化しかけた面でまた点が生まれて、線でつながったり、ひびわれしていく力動過程を記述していくためには、執筆者らと基本的な問題意識を共有できる人々が、より大きな枠組を持ちながら、事実を整理し、集積しあう機会をさらに求めなければならないであろう。

(田中欣和)